

中世臨濟宗徹翁派における入室について

安藤嘉則

一、はじめに

入室とは参学の者が師家・住持の室に入つて自らの所解を呈し、師の鉗鎚を仰ぐ禅林古来からの参禅の形態である。多くは入室参禅、あるいは入室独参といわれているように、基本的には一対一で親しく師家に参するものであり、公案禅においては中心的な意義を有する修行である。百丈懐海の古清規を伝える『禅門規式』には「除_二入室請益_一任_二学者勤怠_一」とあるように、古くは「入室請益」といわれ、臨濟禅では公案を課して、勤辨する（入室勤辨）形態がとられている。元来入室は時期を定めるものでないが、今日では『校訂清規』に基づいて三、八の日をもつて入室の日と定める場合が多いといわれる。^{〔1〕}ところでこのように基本的には独参という閉ざされた空間で行われていた入室が、次第に禅林の中で公開的な傾向を帯びてくるようになっていく。

近世臨濟宗の学匠無著道忠（一六五三―一七四四）はその『禅林象

器箋』第十一類「垂説門」の「入室」の項において、中国・日本の禅林における入室に関する資料を提示している。

已下略録_ス入室之後。行_二普説_一者_ラ上。

破菴ノ先禅師ノ録_ニ云。径山ノ西堂寮入室罷_テ。衆請_{シテ}就_レ座_ニ普説。

雪巖欽禅師ノ録_ニ有_二入室ノ後普説_一。

大休ノ念禅師ノ寿福録。有_二相模守殿ノ府中。入室陞座_一。

永平ノ元禅師曰、如浄和尚。入室已前_ニ。行_二普説_一。

已下。畧録_ス日本国行_二入室_一者_ラ上。

栄西ノ興禅護国論_ニ云。入室_トハ。謂遇_テ和尚閒暇之日_ニ。建_二立_ス

之_ラ。此宗ノ一大事也。

聖一国師年譜_ニ云。後宇多天皇。建治元年乙亥。師七十四歳。九

月。藤丞相実経。泪_ヒ其子家経。率_テ諸ノ官徒_ラ。入_レ山請_{シテ}*

師_ラ上堂。且復行_{シム}入室ノ禮_ラ。

約翁俛和尚塔銘ノ序_ニ云。上躬_ラ入_レ山_ニ。請_レ師_ヲ為_レ衆ノ入室。御_二龍

床於_二壽室之左_ニ。顧謂_二侍臣_一曰。此叢林盛典也。朕深_ク敬

悦。師時住南禪上、後醍醐天皇也。

大休ノ念禪師寿福録相模守府中。入室。見前。又法光寺百日ノ陞座ニ云、法光寺殿。休沐之暇。會ニ諸山ノ知識茶話一。命レ僧入室下語セシメ。。激ニ揚シテ宗旨一。要レ使コトヲ下未レ信ニ宗乘ヲ一者ヲシテ。知レ有コトヲ中自己一段ノ大事因縁上。

義堂ノ日工集云。府君問。古人入室。儀式如何。余答曰。日本ニハ則吾カ先師住セシ天龍一時。有リ入室之儀一。近来不レ聞レ行コトヲレ之。

入室。有下毎トニ三日一行レ之者上。曹源生禪師録。歳夜小参ニ云。死心和尚云。叢林小参。謂ニ之家訓ト一。莫シヤ下是談レ玄須ニ緩歩一。

語ハ要ニ低聲一。嚴ニ淨律儀一。精中持スルコト戒行ヲ上。磨。錯。

入室。有ニ隔日ニ一行レ之者一。介石ノ朋禪師柏山ノ録上堂ニ云。柏山小小ノ叢林。安居九十日。五日不ニ陞堂一。隔日不ニ入室一。

日本入室。不レ妨二人觀聽一。中華亦有レ例。東坡外紀云。師民瞻

詩注云。佛印禪師。法名了元。(後略)

『禪林象器箋』(明治四二年 三寶書院復刊本)、四四一—四四二頁。傍線は筆者。

この無著によって示された入室の資料(部分)を見ると、中国の禪林においては入室と普説、すなわち個別指導と全体講義がセットになる場合もあつたことがわかる。また日本では健治元年(一二七五)九月に東福寺にて聖一國師に対して一條実経とその子家綱が文武百官人を率いて上堂を請い親しく入室参禅していたこと²⁾。また南禪寺にあつた約翁徳儉(一二四四—一二三二〇)に対して後醍醐天皇が大衆の入室

の様子を見て深く敬い悦ばれたことなどが知られる。こうした用例を挙げた上で、無著は日本の入室が必ずしも他人の見聞することを妨げるものではないことを指摘するのであり、中国の禪林の先例として『東坡外紀』の資料をも提示したのである。こうした傾向が実は後で大徳寺派の入室で検討するように、日本の入室がいわゆる在家に公開された仏事法要や祝聖などに転用されていく下地となっているのである。

また、義堂周信(一二二五—一三八八)の『空華日用工夫略集』の記述では、一四世紀中頃の五山派では入室がほとんど行われなくなつた様子を知ることができる。

そこで本稿では、中世林下の禪林における入室なる修行形態について、大徳寺派の場合に特徴的にみられる事例について以下に紹介し、検討してみたい。

二、中世大徳寺派における入室の変遷

中世から近世の大燈国師の門流は五山派を駆逐していく勢いで各地の禪林に展開していくのであるが、このうち大徳寺派は大徳寺一世となる徹翁義亨(一二九五—一三六九)によってその礎が確立されて華叟宗曇(一二三二—一四二八)やその弟子養叟宗頤(一二七六—一四五八)や一休宗純(一二三九—一四八一)らが出ることによって勢いを増し、特に養叟の門下が主流となつて大徳寺は戦国時代を向え、豊臣の時代になると、これまでの皇室とのつながりだけでなく、中央

政権との関わりをもつようになり、各地の大名らの帰依を受けて塔頭も次々と成立している。

このような状況において元来は叢林の中で学人が室内において密々裡に修行する入室参禅が独特の展開を遂げるにいたるのであるが、まず最初に一休宗純の師兄である養叟宗頤が泉州に陽春菴という養叟の入室屋を建立した際に五種行をなしたことが『自戒集』に伝えられ、この五種行の中に入室が掲げられている。

康正元年ノ秋ノ末、養叟泉ノ堺ニ新菴ヲ建立ス。菴号ヲ陽春菴ト云。異名ヲ養叟ノ入室屋ト云。同十二月ニ堺ヘ下向アリテ安座點眼菴ヒラキニ五種行ヲ行フ。

一ニハ入室。一ニハ垂示着語。一ニハ臨濟録ノ談義。一ニハ参禅。一ニハ人ニ得法ヲオシウ 『自戒集』(酬恩庵藏)

この五種行でいわれる入室は、一人一人が養叟の室に入って古則を商量した、今日の入室参禅に相当するであろう。また垂示は養叟が折に触れ随時会下に教示することであり、談義は提唱のことである。

ところで、『大徳寺禅語録』(全七卷)に解題をつけられた平野宗浄氏は、大徳寺派を大きく展開させていった養叟下の僧の中でも、大徳寺南派(龍源院)の祖東溪宗牧(一四五四—一五一七)の語録について、次のような評価をされている。

A 『大徳寺禅語録』第一巻の解題(平野宗浄氏による)

東溪と古嶽は、過去の一休と養叟のようにライバル意識があったことは間違いないようであるが、歴史家は未だ明らかにしていない。生存しておられた頃の二人の実力の相違は全く不明であるが、

B 『大徳寺禅語録』第三巻の解題(平野宗浄氏による)

現在残されている語録を比較する限りにおいては、東溪語録の方が面白いと筆者は感じられる。勿論これには人々の好みによって異論があるであろう。それはさておき、古嶽語録の方は大体養叟以来の伝統を墨守しているが、東溪語録の方には、「室中語要」と「入室勘辨」というのがあり、語録の約三分の一を占めている。これは『徹翁録』以後、東溪の前にも後にもなく、大燈、徹翁に復古したという感じがあり、実に貴重な資料といわねばなるまい。しかしながら、南派は東溪以降、語録という観点からすると勢力が弱くなる。少なくとも数でいっても本集成の収録数では、北派が三二に対し南派は二二、龍泉派が三となっている。そして何故かわからぬが北派の方に有名な人が多い。その中でも有名なものは沢庵であるが、語録の方でも質量共に群を抜いている大徳寺派としてはこの頃が北派の最も隆盛な時期であることは語録から見ても推察できる。そして江戸時代の沈滞期に最終的な花を咲かせたのは、天倫宗忽とその門下の人達であった。そしてその中の大心義統は『龍宝山誌』等を撰述し、大徳寺の教団を歴史的に確証づける役割を果たしたのである。

『大圓禅師語録』三冊。『東溪宗牧禅師語録』略して『東溪語録』ともいう。今回の影印には真珠庵藏の写本を使用した。この語録の特色は、第一巻から第二巻にかけての「室中語要」と「入室勘辨」にある。この「室中語要」とはその名を『雲門広録』から採

つたと思われるが、内容も『雲門広録』を意識しており、復古の意気が感じられる。そして題材も唐代禪語録のみならず、大徳寺時代の祖師達の語を多く用い、他の語録に見られぬ貴重な資料ともなっている。「入室勘辨」というのは東溪とその弟子達との問答を記録したもので、こういう「勘辨」というのは、徹翁以後これが唯一のものであろう。さすがに大徳寺南派の語録だけあって、その独自性は他の追隨を許さない。(傍線は筆者)

ところで平野宗浄氏によって指摘された東溪宗牧の「入室勘辨」なるものはその語録に次の三例が収録されている。⁽³⁾

永正六己巳年元旦 於養徳院

師問云、江西馬大師因龐居士問、不與萬法侶者是什麼人。請首座一轉語。

首座云、天地之太祖、萬物之根源。師云、意旨如何。

座云、隨處為主。

師云、大師答曰、待汝一口吸盡西江水、即向汝道。意旨如何。

座云、盡情鳴鳥報新春。

師云、報底響。座云、徹底老婆心。

師便打云、甲乙丙丁庚戊己。洛陽牡丹新吐葵藿。

一僧云、天上天下唯我独尊。師云、如何是独尊底。僧云、徧界不曾藏。師便打。

曾藏。師便打。

一僧展掌云、露。師云、意旨如何。僧云、跏趺香案上。

師云、跏趺底、響。僧云、現大人相、便喝。師便打。

銳

一僧云、如日虚空住。師云、意旨如何。僧云、照天照地。師便打。

堅

一僧提起坐具云、這一宝秘在形山。師云、秘在底、響。僧擲下坐具云、七花八裂。師云、意旨如何。僧云、收拾修補却為團。師便打。

勝

一僧云、只在目前。師云、目前底作麼生。僧云、透徹十方。師云、意旨如何。僧云、孤迥々々。師便打。

越

一僧云、天地玄黄宇宙洪荒。師云、意旨如何。僧云、撥不散、擁不聚。師云、不聚底、響。僧云、佛祖無分。師便打。

了

一僧云、成龍昇天、成蛇入草。師云、意旨如何。僧云、天下衲僧不知落處。師云、為什麼不知。僧云、鉄壁々々。師便打。

桃

一僧云、容顏甚奇妙、光明照十方。師云、意旨如何。僧云、撐天拄地。師便打。

岳

一僧云、在眼曰見、在耳曰聞。師云、意旨如何。僧云、普。師便打。

□

一僧云、常處地獄、如遊園觀。師云、意旨如何。僧云、通貫十方。師云、通貫底、響。僧云、当面相遇。師便打。

九

〔中略〕

一僧云、大在天地日星、小在虫鳥艸木。師云、意旨如何。僧云、徧界不曾藏。師云、前有人道、更道々々。僧云、露堂々。可一僧云、乘風騎雨。師便打。

繁

一僧云、即今滿室。師云、意旨如何。僧云、更有堆席。師便打。

ン

一僧云、生鉄崑崙、雲外走。師云、意旨如何。僧云、大悲千眼不能看。

松

一僧云、声前拍不散。句後覓無蹤。師云、為什麼無蹤。僧云、明暗雙々。師云、意旨如何。僧云、鉄圍關。師云、待一口盡西江水、即向汝道。意旨如何。僧云、恰似蚌蛤禪。師云、如何是蚌蛤禪。

僧云、露出肝膽。師便打云、敲出鳳凰五色髓。 侍者恚

この入室勘辨の資料では、各問答をかわした会下の名も明記されており、このうち道号まで確認されるのは首座の功仲宗全、侍者の悦溪宗恚である。このように東溪宗牧は会下に元旦・冬至に因んで古則を商量させていたのであり、この入室勘辨の資料は当時の入室の様子が具体的に知ることができる貴重な資料であるといえるであろう。この古則商量では、「一人云」とあつて僧以外の者がこの入室に加わっていることも注目される。

ところで、このように古則に対する問答を収録した文献資料として検討されているのが、北見修氏蔵の『仙嶽宗洞答問二十一條』（以下『二十一條』）なる文献である。これについては田中博美氏による研究がなされているが、この資料は次のような内容である。

④『天正三年仙嶽宗洞答問二十一箇條』

師問曰、昨夜虚空神夢中到云、歳旦令辰、和尚随例、拳揚旧話頭、

勘辨大衆了、遽然而夢覚、記得、江西馬大師因龐居士問、不与

万法与為侶者是什麼人、請首座下一語、看、首座云、今日入室、

梅根蟠宇宙、枝茂乾坤、師曰、意旨如何、座云、能為万像主、不

遂四時凋、師曰、大師答云、待汝一口吸冬西江水、即向汝道、意旨作麼生。座云、費冬、老婆多少力、師曰、更道、座云、錦心繡口向人開、師打曰、不謬為第一座、 園

一、僧云、至宝當軒光含万像、師曰、意旨如何、僧云、通貫十方、師便打、 文

一、僧云、三世諸佛亦恁麼、歷代祖師亦恁麼、師曰、意旨如何、僧云、只管由之、師便打、 壽

一、僧云、誰敢近傍、師曰、意旨如何、僧云、牙如劍樹、口似血盆、師便打、 慶

一、僧云、豁開戸牖當軒者誰、師曰、意旨如何、僧云、天上天下唯我濁尊、師便打、 幸

一、僧云、久遠已前要即瞎、即今亦要看即瞎、師曰、瞎底在、僧云、黒漆桶裏盛墨汁、師便打、 永

一、僧云、無量珍寶不求自得、師曰、如何是無量珍寶、僧云、滿室堆席、師便打、 栢

一、僧云、鱗鬪黃頭難甌別、師曰、難甌別底甌、僧云、鷺鷥立雪、師曰、意旨如何、僧云、白漫々、師便打、 好

一、僧云、古木花開劫外春、師曰、如何是古木花、僧云、從無根長、師便打、 悅

一、僧云、認作夜明珠、師曰、如何是夜明珠、僧云、輝古輝今、師便打、 椿

一、僧云、南山白額虎、師曰、如何是白額虎、僧云、佛祖倒退三千、師曰、意旨如何、僧云、昏昏々、師便打、 仙

一、僧云、莫把是非來辨我、浮生穿鑿不相干、師曰、不干底在、僧云、莫然物外、師便打、

一、僧云、此是竜興山頂主、師曰、如何是主、僧云、當軒大座、師便打、

一、禪人云、鯉趨而過庭、師曰、意旨如何、禪人云、活粧々地、師便打、

一、禪人云、南宗有一條鼈鼻蛇、師曰、如何是鼈鼻蛇、禪人云、即今難近傍、師曰、難近傍底在、禪人云、頭角崢嶸、師便打、壽

一、禪人云、恰似清稅孤貧、師曰、如何是貧、禪人云、本來無一物、師曰、如何是無一物處、禪人云、淨濬々赤洒々、師即打、狐

一、禪人云、盡力高聲呼不應、師曰、為什麼呼不應、禪人云、活卓々、狐迴々、師便打、

一、禪人云、大力量人、師曰、如何是大力量人、禪人云、盡大地撮來如粟米粒大、師便打、

一、禪人拍手云、此聲聞梵天、師曰、如何是聲、禪人云、木人打鼓石女起舞、師曰、舞底在、禪人云、無為無事故師便打、

一、禪人云、無影樹下合同船、師曰、如何是合同船、禪人云、消得多少風、師曰、消得底在、禪人云、失、師便打、

一、僧云、佛法与王法一般、師曰、如何是一般底、僧云、威雄震十方、聲價動寰宇、師曰、大師答云、

待汝一口吸塵西江水、即向汝道、意旨作麼生、僧云、陰谷生春、師曰、如何是陰谷春、僧云、引得黃鶯下柳伽條、師便打曰、真獅子兒、

卷

泉

易

天正三年乙亥正月朔旦

侍者宗登焉記

(以下後筆)

仙嶽洞禪師之真跡也、師初諱字作登、後改洞、是於豫矣、

宗竺證(印)

この『二十一條』でも東溪宗牧の入室勤辨と同様に師家が古則を挙げ、問答の応酬が次々と展開されている。今この問答に参加した僧俗を確認するならば、師家は笑嶺宗訢(一〇七世 一四九〇—一五六八)で、首座が春屋宗園(一一一世 一五二九—一六一一)であり、千宗易(一五二二—一五九一)・津田宗及・山上宗二・博多屋宗壽などの茶人などの問答を経て侍者の仙嶽宗洞(一二二世 一五四五—一五九五 南宗寺を開く)で終了している。

ここで師家である笑嶺宗訢が傍線のごとく「和尚随例、挙揚旧話頭、勤辨大衆了」という夢告によって問答を展開しており、「随例」という語からこの天正年間までには大徳寺派において元旦に古則を勤辨することが、しばしば行われていたことを知ることができるであろう。この『二十一條』は入室として位置づけられてはいないのであるが、その形態は東溪の「入室勤辨」と同様であり、①東溪の元旦の勤辨で用いた古則(万法不侶)と同じ古則を選定している点、②参加者も僧俗にわたっている点、問答も首座からはじまり、③僧俗の問答の後、侍者で締めくくる点、④参学の者の名(系字は略)を明記している点等、が共通している。

ところで、このような入室勤辨については、実はこの東溪宗牧・笑嶺宗訢の以外にも、いくつかの資料が見出されるのであり、管見に

よる限りではあるが、東溪・笑嶺の資料も含めて改めてまとめてみるならば左記のごとくである。

【徹翁派における入室資料のリスト】

- (A) 『大圓禪師語録』(真珠庵藏、写本、三卷、『大徳寺禪語録集成』第三卷一―百七頁に影印収録。)中の「入室勘辨」(卷二)ア四〇―四一頁 「元旦入室」 「永正六己巳年元旦 於養徳院」
- イ四一―四二頁 「冬至入室」 「永正七庚午十一月十四日於江洲中興寺 虬戸者方丈額也」
- ウ四二―四三頁 「元旦入室」 「永正八年未元旦於一枝軒」
- (B) 『仙嶽宗洞答問二十一條』、北見修氏藏、
- (C) 『垂示記 入室記』、松ヶ岡文庫(クハ・二五五)藏、写本、一冊、三三丁、題簽に「梅隱和尚筆」とあり。
- ア一表―六表 「元旦入室」 奥書「元和八壬戌年正月日侍者宗吉誌之」
- イ七表―一一裏 「天徳院殿乾運淳貞大禪定尼卒哭忌(入室)」 奥書「元和第八壬戌年小春十又四日」
- ウ一三表―三〇裏 「聴歌(垂示)」
- エ三一表―三四表 「仙洞宮中入室」 奥書「慶安三庚寅仲秋十九日 侍者宗竺記焉」
- (D) 『大徳寺入室行記(外題)』、内題は「於大徳寺入室行卷」、内閣文庫藏、写本、一冊、六丁。

このような入室資料の多くは先の東溪・笑嶺の資料に見たように入室の時期・場所・機縁・古則・師家・首座・侍者がほとんどが明示されているので、右記の(A)から(D)の資料にみる入室勘辨の事例を年代順に整理して列挙するならば以下のごとくである。

【徹翁派における入室の事例】

- (ア、時期 イ、場所 ウ、機縁 エ、古則 オ、師家 カ、首座 キ、侍者)
- ①ア、永正六年(二五〇九)一月一日 イ、大徳寺養徳院 ウ、元旦入室 エ、万法不侶 オ、東溪宗牧
カ、功仲宗全 キ、悦溪宗恚
- ②ア、永正七年(二五一〇)十一月十四日 イ、中興寺(近江)ウ、冬至入室 エ、慈明冬至勝
オ、東溪宗牧 カ、悦溪宗恚 キ、記載なし
- ③ア、永正八年一月一日 イ、一枝軒(永正七年以降は龍源院)ウ、元旦入室 エ、万法不侶 オ、東溪宗牧 カ、不明 キ、不明
- ④ア、天正三年(二五七五)正月元旦 イ、堺南宗寺ウ、歳旦入室 エ、万法不侶
オ、笑嶺宗訢 カ、春屋宗園 キ、仙嶽宗洞(宗登)
- ⑤ア、元和三年(一六一七)八月一日 イ、大徳寺〔芳春院〕ウ、芳春院殿花岩宗富大姉小斂(斂カ)忌 エ、万法不侶
オ、玉室宗珀(一五七三―一六四一)カ、江月宗玩 キ、宗規
- ⑥ア、元和八年(一六二二)正月元旦 イ、大徳寺 ウ、元旦入室

エ、万法不侶　オ、不明　カ、龍嶽宗劉　キ、宗吉

⑦ア、元和八年（一六二二）小春十又四日　イ、大徳寺〔芳春院〕

ウ、天徳院殿乾運淳貞大禪定尼卒告忌　エ、那吒太子折骨折肉

オ、不明　カ、江月宗玩　キ、正隠宗知

⑧ア、慶安三年（一六五〇）八月十九日　イ、仙洞御所

ウ、仙洞宮中入室　エ、万法不侶　オ、玉舟宗璠

カ、江雪宗立　キ、天室宗竺

この中で、⑤から⑧までの入室勘辨の写本資料は未だ紹介されていないと思われるので以下に翻刻し、検討を加えたい。

まず⑤と⑦は加賀前田家に関わる入室勘辨の資料である。

⑤於大徳寺入室行巻

丁芳春院殿花岩宗富大姉小斂忌之辰營弁處會之次、大功徳利光公

令山竺入室勘弁、峻拒者再三、雖然如此檀命難遁避、曲順人情方

登此座、慙汗不少、各賜恕宥。

拳旧公案曰、江西馬大師因廬居士問、与萬法為侶者是什广人。

請首座下一轉語来。

座云、付与吸盡西江水者。

師曰、付与底甕。座云、聖口不能知佛亦不能弁。

師曰、為什广不能弁。座云、康正八極蜜定九夷。

師曰、大師答云、待你一口吸尽西江水便向你道、意旨作广生。座

云、付与不与萬法為侶者。

師曰、付与底甕。母儀天下子育生靈。

師問曰、昔日梁武帝問達广大師、朕起寺度僧有何功德。磨云、無功德我這壇越起寺度僧、若致恁广問對他道無功德即是道有功德即是。座云、會者可稀。

師曰、諾々會者可稀首座試道、看。座云、向一莖草上現瓊樓玉殿。

師曰、如何是現底。座云、正法芙蓉初日開。

師打曰、若不同床睡焉知被底穿。

一、僧云、湛然不動無上尊。

師曰、如何是無上尊。僧云、大地戴不起。

師曰、為什广大地戴不起。僧云、拽。

師曰、大師答云、待你一口吸尽西江水便向你道意旨如何。

僧云、岩下風生虎生兒。

師曰、弄底作广生。僧云、怒面靄然和氣。

師打曰、口倒疎慵無事日、安眠高臥對青山。

一、僧云、昨日橫戈領百蛮、今日敷文降高口。

師曰、意旨如何。僧云、喚作綠髮將軍即是、喚作明德口子即是。

師曰、你喚作什广。僧云、天上天下唯我独尊。

師曰、大師答云、待你一口吸尽西江水便向你道是何心行。僧云、

八月圓春入室梅。

師曰、如何是入室梅。僧云、現成公案指示人。

師打曰、二十年來打成一片為這事。

一、僧云、法王法身全体現。

刘（3）

師曰、為什广不得活捉。僧云、在前忽然在後。

師打曰、消得恁麼。

杲 (15)

師打曰、知即得。

察 (21)

一、僧曰、此來天地一閑人。

師曰、意旨如何。僧云、捻不動著。

師曰、為什广不動著。僧云、鉄。

師打曰、雨下地上湿。

玉 (16)

師打曰、重賞之下必于勇夫。

吉 (22)

一、僧云、問起種風捻不知。

師曰、為什广不知。僧云、不于陰陽造化功。

師曰、不于底響。僧云、離名利相。

師打曰、是精知精。

知 (17)

一、僧云、折衝儒墨陣堂。

師打曰、可然新鮮。

的 (23)

一、僧云、一輪高掛万国同觀。

師曰、如何是同觀。僧云、大光普照。

師曰、意旨如何。僧云、頭上漫、脚下漫。

師曰、一葉落知天下種。

渭 (18)

一、禪人云、疇夕於江南相見今晚於洛北相見。

師打曰、花簇、錦簇。

采 (24)

一、僧云、這獨眼竜。

師曰、恰似自負。僧云、威行萬國之中光透八紘之表。

師曰、意旨如何。僧云、普。

師打曰、慕明招風規。

閑 (19)

一、禪人云、脚下一段光明。

師打曰、竜戲滄海虎嘯南山。

橘 (25)

一、僧云、北山銀地。

師曰、如何是銀地。僧云、白漫。

師打曰、咩。

玖 (20)

一、禪人云、不審。

師曰、不審這什广。禪人云、非僧非俗。

及 (26)

一、僧云、一人居日下与衆人不同。

師曰、為什与衆人不同。僧云、瞻之仰之。

一、堂同云、此是當軒大坐。

旦 (27)

師曰、如何是殿理古佛。堂云、當軒大坐。

師曰、莫輕。

知盛(28)

一、僧云、不分黑白。

師曰、為什广不分。僧云、力□希。

師曰、大師答曰、待你一口吸盡西江水便向你道、意旨如何。僧云、時節已至其理自彰。

師曰、如何是彰底。僧云、桂花八月為誰開。

師打曰、有意氣添意氣。

(29)

元和三丁巳年仲秋朔日

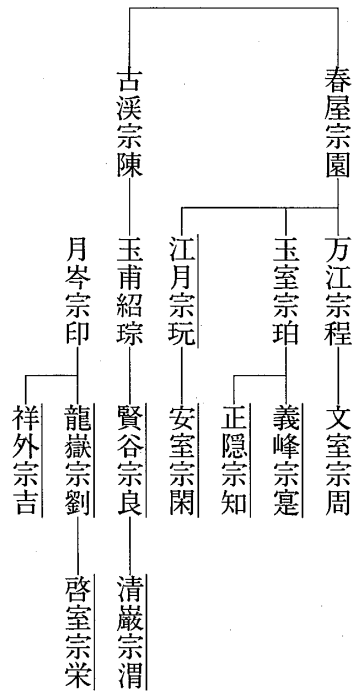
宗規記焉

この⑤の入室資料も東溪宗牧・笑嶺宗訢と同様の形態であり、入室参禅した会下の名が首座から最後の侍者に至るまで順次明記されているが、師家として大衆を勸辨した僧の名は明示されていない。この中首座の江月とは大徳寺一五六世の江月宗玩(一五七四—一六四三)

のことで茶人津田宗及の子で、春屋宗園の法嗣である。黒田長政の帰依を受けて龍光院を開き、また小堀遠州の帰依も受けて孤蓬庵を開いている。この他、会下で確認されるのが良(賢谷宗良 一五九世?)

一六二二)・劉(龍嶽宗劉 一六四世「一六二二」一五五七—一六二八)・周(文室宗周 一六六世「一六二三」一五七二—一六四〇 万江宗程の法嗣)・寔(義峯宗寔 一七一世「一六二五」一五八六—一六二七 玉室宗珀の法嗣 通玄庵開く)・知(正隱宗知(智) 一七二世「一六二七」一五八八—一六二九 玉室宗珀の法嗣)・渭(清巖宗渭 一七〇世 一五八八—一六六一)・閑(安室宗閑 一七六世

一五九〇—一六四七 江月宗玩の法嗣)・玖(瑤林宗玖 一四八世 一五五八—一六一三)・栄(啓室宗栄 一八七世 一五九七—一六六六 龍嶽宗劉の法嗣)・吉(祥外宗吉 贈徳禅 龍嶽宗劉の兄弟弟子)である。また禅人として「旦」とあるのは千利休の孫で今日の三千家の祖千宗旦(一五七八—一六五八)であろう。以上確認できた僧の法系を記すならば次のごとくである。



これによって、この入室が春屋を祖とする大仙門下三玄派と古溪宗陳を祖とする大仙門下大光派という大徳寺派北派の二大門流に亘って参加していることがわかる。

ところでこの入室資料では「丁芳春院殿花岩宗富大姉小斂忌之辰營弁處會之次、大功徳利光公令山埜入室勸弁」とあるように、この入室が芳春院殿の小斂忌(三五日)の供養に因んで営修されている。この芳春院殿花岩宗富大姉とは前田利家夫人であり、この法要の功德主である前田利光の母である。前田利光は前田利家の四男であるが、兄の利長(第二代金沢藩主)の資子となり諱を利光としたが、寛永六年に

利常に改め、第三代金沢藩主となっている。

『龍宝山大徳禪寺志』の芳春院の項には「慶長年中、加賀金沢城主中納言前田備前守利長母華岩夫人所造」(『史料大徳寺の歴史』四五七頁参照)とあって、利家夫人が芳春院を建立した記述が見えるが、『宝山外志』では

前田筑前守菅原利家 権大納言正二位、居加州金沢城、領二十三万石、曾為雲叔和尚、重修興臨院、嫡男中納言利長卿 為故妣華岩夫人、建芳春院、請玉室和尚、為第一世、是夫人在日、問法於円鑑・玉室二師也。(『史料大徳寺の歴史』四五七頁参照)

とあるので、前田利家夫人(芳春院)が玉室宗珀(一四七世 一五七二—一六四一)らに問法したのを機縁に、前田利長(利三)が母の供養のため玉室宗珀を迎えて開いたのが大徳寺北派塔頭の芳春院であったのであり、現在も芳春院には前田利長・利常・芳春院の墓がある。

このように玉室宗珀と前田家の密接な縁によって芳春院が成立したのであり、この入室勘辨の師家は玉室宗珀であったと考えられる。玉室は春屋宗園の俗姪で法嗣となった僧で、芳春院の他にも大源菴・高林菴を開創している。なお、あくまで形式的なことであるかもしれないが、この入室の冒頭に「大功德利光公令山竺入室勘弁、峻拒者再三、雖然如此檀命難遁避」とあるように、この入室が行われる機縁が、僧侶側から設定されたのではなく檀越からの依頼によって成立していたという点も留意される。

次に⑦の入室資料は以下のごとくである。

⑦師曰壬戌小春十又四日延

△天徳院殿乾運淳貞大禪定尼卒告忌之辰也。大功德主利光公捨淨財設齋會之次、挙旧公案講家訓之規模矣。那吒太子折骨還父折肉還母。然後現本身為父母說法、底即不問。如何是本身、請首座下一轉語、看。

座云、直指人心、見性成仏。

師曰、如何是見性成仏。座云、称之百日主人。

師曰、為什广称主人。座云、法天合徳。

師曰、意旨如何。座云、月不為一物晦其明。

師曰、不晦底響。座云、燁赫乎字□。

師問曰、上来事姑置、那吒太子現本身為父母說法、山僧方登此座、為淑靈說法有異問广。

座云、有堪聽有不堪聽。

師曰、意旨如何。座云、語中黙、中語。

師曰如何是語中黙。座云、雲在嶺頭閑不徹。

師曰、如何是黙中語。座云、水流澗下大忙生。

師曰、畢竟如何。座云、大難、。

師打曰、衆星雖□不如一月。江月和尚(1)

△僧云、滿眼滿耳。

師意旨如何。僧云、声彰色顯。

師曰、声色顯底響。僧云、明歴、。

師打曰、脚踏實地。

△僧云、大用現前不存軌則。

師曰、為什广不存軌則。僧云、有時成竜昇天、有時成蛇入草。

檢(2)

師曰、如何是成竜昇天者。僧云、風吹不入。

師曰、如何是成蛇入草者。僧云、水洒不着。

師曰、畢竟如何。僧云、元是一枝生鉄。

師打曰、用得太峻。

規 (3)

△僧云、在那吒太子与和尚同路底。

師曰、如何是同路底。僧云、換禪定肉智惠骨具本身故。

師曰、如何是本身。僧云、煒こ煌こ巍こ堂こ。

師打曰、若知落処独歩青霄。

璉 (4)

〔中略〕

△僧云、清浄本然。

師曰、如何是本然。僧云、大道分明絶点塵。

師曰、絶底作广生。僧云、鑊湯無冷處。

師打曰、虎嘯風生。

璠 (24)

△行者云、都離室中諸問答。

師曰、離底響。行者云、不在舌頭上故。

師曰、為什广不在。元無物。

師打曰、恰是。

元盛 (25)

△俗漢云、吾無隱。

師曰、為什广無隱。俗漢云、從諸人面門出入。

師曰、如何是出入者。俗漢云、一个自由身。手作舞云、平舞、足

一蹈云、足蹈。

師打曰、打成一片為這事。

等清 (26)

△僧云、向成音那畔別立生涯。

師曰、如何是別底生涯。僧云、神通妙用本躰如然。

師曰、如何是神通妙用。僧云、妙玄獨脚。

師曰、如何是本躰如然。僧云、廓然無聖。

師曰、落処作广生。僧云、力口希。

師問曰、爰有所問。即今淑靈現無相、降臨這室中、慶讚底一句、

你速道将来。僧云、不干我事。

師曰、為什广不干。僧云、松風說法蘿月談空。

師曰、与广則三世諸佛立地聽。僧云、喏こ。

師打曰、他時異日向孤峯頂上立吾道去在。

元和第八壬戌年小春十又二日

侍者 宗知記焉

(27)

この入室資料も⑤と同じ形態であり、首座も同じ江月宗玩である。侍者は正隠宗知(智)に変わっているが、宗知は玉室宗珀の法嗣であるので、やはりこの入室も玉室宗珀を師家として行われたと考えられる。

この場合も「天徳院殿乾運淳貞大禪定尼卒告忌之辰也、大功德主利光公捨浄財設齋會之次」とあるように、仏事に因んだ入室勘辨である。この天徳院とは徳川秀忠の次女珠(珠姫)である。珠姫は三歳で金沢へ入り、一四歳で前田利常夫人となり、その後三男五女を生み、緊張関係にあった徳川家と前田家との融和に努めた人物であった。元和八年(一六二二)春に夏姫を出産後、七月三日に二四歳という若さで没し、八月八日に金沢城外の小立野の地で葬儀が行われ、遺骨が金沢と高野山に分骨されている。

すなわちこの入室は前田利光（利常）が亡き妻の百ヶ日の供養の設齋に因んだもので、⑤の母の供養を先例として行われたのである。

なお、翌元和九年に利常は小立野台に天徳院を建立し、翌寛永元年（二六二四）には曹洞宗の巨山泉滴（一五六一—一六四一）を長安寺（千葉県）より第一世として迎えている。曹洞宗の巨山を迎えたのは、巨山が家康との深い結びつきがあったからであるといわれる。

さて以上のようにこの元和三年と元和八年の入室は前田家の仏事に因んだものであり、前田利常自身の参学としてではなく、あくまで母・妻の菩提の冥福を祈る意味でなされていた点は本来の入室の意義が檀越に向けてこうした新たな意義を付加されていたことを知るのである。

次に元旦入室に関する資料が松ヶ岡文庫蔵の『垂示記入室記』中に見られるので、以下に元和八年元旦の入室勸辨の資料を紹介したい。

⑥〇元旦入室

△師一手拈竹篋、一手擒住首座曰、到吾這裏、無可一法之拳揚。況山野累月違例胸鬱不正、目瞪耳聾矣。忘前失後雖非尋常、曲順人情、方登此座。

拳田公案、因雁居士問江西馬大師云、不与萬法為侶者是什人。

請首座下一轉語、布諸人、看。

首座答云、百獸潛迹。

師曰、潛迹底響。首座云、雲門猛菴菟振威於四海。大德活獅狩現形於八荒。

師云、如何是現八荒底活獅狩。座云、一毛頭上定乾坤。

師云、大師答云、待你一口吸盡西江水便向你道、便意旨作广生。座云、鼻孔指南。

師云、落所作广生。座云、正月木犀吹入室香。

師曰、這ヶ問話姑置、昔年有僧問鏡清、新年頭還有佛法也無。清云、有。々佛法底意旨作广生。座云、吾無隱。

師曰、為什广無隱。座云、一轉朝日界大千。

師又問曰、清又云、元正啓祚萬物咸新。是什广意旨。

座云、昔年鏡清今日和尚。

師曰、意旨如何。座云、密啓如雷。

師曰、畢竟作广生。座云、遠山無限碧層、。

師打曰、莫守寒岩異草色、坐斷白雲字不妙。

△僧云、喚之作玉林月。

師曰、意旨如何。僧云、圓光皎、輝寒虛。

師曰、輝底響。僧云、人、盡瞻仰。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水便向你道、便意旨作广生。

僧云、啓廣照法門現大慈佛。

師曰、如何是現底大慈佛。僧云、露出莠口錦心。

師打曰、將謂宗門龜鑑。

△僧云、此是為法華八軸第一。

師曰、意旨如何。僧云、如此我聞。

師曰、如何是你聞底。僧云、靈音囑耳。

師打曰、青原白家酒三盞喫了、猶道未活唇。

△僧拳坐具云、突出面前。

刘 (1)

珀 (2)

珪 (3)

師曰、突出底響。僧云、黒漆崑崙。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水便向你道、意旨作广生。

僧云、祖師肝膽向人傾。

師曰、如何是傾底。僧云、一場漏逗。

師打曰、能縱能奪能殺能活。

△僧云、大慈振法鼓在和尚入室底。

師曰、意旨如何。僧云、乘菩薩車、坐如来座故。

師曰、畢竟如何。僧云、誰敢近傍。

師打曰、道太任你道。祇是千年桃核。

〔中略〕

△僧云、萬牛不動五丁愁。

師曰、為什广不動愁。僧云、挽不来推不玄。

師曰、如何是不去不来。僧云、鉄山鉄壁。

師打曰、後学初機学者更須究取。

△僧云、這是大圓鏡。

師曰、如何是大圓鏡。僧云、照破一朵万朵。

師曰、照破底響。僧云、頭と露と。

師打曰、千里行始自一步。

△禪人云、即今響乾坤。

師曰、響底響。禪人云、白鼻崑崙賀新正。

師曰、如何是賀新正底。禪人云、万歳とと、万と歳と。

師曰、落処作广生。禪人云、元是鉄。

師打曰、雖是俗人閑陋句、還有衲僧巴鼻。

△行者云、付与我家之磬抱。

師曰、什广意旨。行者云、作打空中勢。

師曰、作響广。行者云、作聽勢云、近聽勢云、近聽聲愈好。

師打曰、向佛殿裏打鼓普請看。

規 (4)

△僧云、躍出威音前、坐断僧祇劫。

師曰、意旨如何。僧云、鉄眼銅睛看不破。

師曰、為什广看不破。僧云、没蹤跡。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水便向你道、意旨作广生。

璉 (5)

僧云、虚空問萬家萬家答虚空。

師曰、聽取者阿誰。僧云、老牛舐犢。

師曰、闍梨□。僧又問明教。新年頭還有佛法也無也。

教云、無。無這事底響。僧云、如水乳合鷲王喫乳。

師曰、意旨如何。僧云、入門早知来見解。

師又問曰、鏡清曰有、明教曰無涉有無不墮旧轍。誠一句道將去。

僧便喝。

你喝老僧那。僧又喝。

師曰、再喝後作广生。僧云、連喝兩喝。

師打曰、養子方知父慈。

元和八年壬戌年正月日

侍者 宗吉誌焉

洞 (24)

以上のごとく一七名の僧俗による入室資料であった元旦入室はすでに示した東溪宗牧の永正六年(1)と同八年(3)の例と笑嶺宗訥の

及 (25)

(4)があり、特に中世末期から近世初頭の大徳寺派では元旦入室が

聽叫潤 (26)

恒例として行われていたことがこの元和八年のこの用例でも確認できる。また①③④と同様に選定された古則も「万法不侶」であり、これが元旦入室の一貫した主題であったことがわかる。この時の首座は大徳寺一六四世「一六二一に晋住」で江戸広尾に祥雲寺を開いた龍嶽宗劉（一五五七—一六二八）であり、侍者は龍嶽宗劉の弟子であった祥外宗吉である。この入室の師家は不明であるが、この龍嶽・祥外の名からその師である月岑宗印（一四一世—一五六〇—一六二二）であると思われる。この入室に参加した僧で確認できるのは玉室宗珀・安室宗閑（一七六世「一六四二」一五九〇—一六四七 和泉の人。江月宗玩の法嗣。寛永元年大徳寺内に瑞源寺を開き、江月を第一祖とす。）正隠宗知（智）（一二七二世「二六二七」一五八八—一六二九 玉室宗珀の法嗣）・啓室宗栄（一八七世「一六五二」一五九七—一六六六 龍嶽宗劉の法嗣）などである。法系的には大徳寺北派の春屋下と古溪下の両派に分布していることがわかる。

次に入室勘辨が宮中にて行われている注目すべき用例が先の『垂示記入室記』に収録されているので以下に紹介したい。

⑧竜宝入室

○ 就于

仙洞宮中入室

祝香

謹焚宝香端為祝延

太上天皇

聖壽万歳、万歳

臣僧紹杲（一）

師乃扱座拈竹篋曰、祖宗元来雖無語句

勅命難辭、不獲已、方登此座、舉揚旧公案、江西馬大師因龐居士問不与万法為侶者是什麼、請首座下一轉語看。

首座云、在天上八月桂花在面前成三尺竹篋。

師云、如何是成轉処桂花底。座云、仰之山弥高。

師云、如何是成面前竹篋底。座云、鑽之弥堅。

師曰、畢竟如何。座云、本體如然。

師曰、大師答曰、待弥一口吸盡西江水即向你道意旨作广生。座云、法。

聖朝 師曰、為什麼广法。

聖朝 座云、曰兩々、曰賜々。

師曰、意旨如何。座云、天地育万物。

師收竹篋擒住曰、爰有一問、祇今 聖代国家安全一句如何道。座云、有好箇消息。

師云、有消息底、響。座矣 堯風蕩々、野老謳謔、舜日熙々、杜稜安寧。

師便打曰、好箇第一座陳尊宿来也。

江雪（二）

△僧云、本朝無双大徳。

師曰、為什麼广道無双大徳。僧云、万仞峯前独足立。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水即向你道意旨作广生。僧云、風從八月清凉。

師云、清凉底響。僧云、四衆感霑恩。

師使打曰、可謂宗門爪牙。

江雲（三）

△僧云、因。師曰、是什广力用。僧云、禪指円成八万門。

師曰、円成八万門者如何。僧云、那吒手把金剛印。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水即向你道意旨作广生。僧云、仙家十二玉樓臺。

師云、意旨如何。僧云、一道恩光從此来。

便打曰、芳春一曲智音少。

玉舟 (4)

△僧云、只管□□。師曰、意旨如何。僧云、鳳凰来儀麒麟視瑞。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水即向你道意旨作广生。僧云、拈起大玉無價宝乾坤何処不光輝。

師曰、如何是無價宝。僧云、放向面前。師便打曰、當機不讓。

師曰、如何是無價宝。僧云、放向面前。師便打曰、當機不讓。

宗珉 (5)

△僧云、諸佛依之轉法輪、祖師依之立宗旨。

師曰、轉法輪底響。僧云、說權實。

師曰、立宗旨底響。僧云、論有論無。

師曰、畢竟如何。僧云、一箇自由身。

師便打。

宗美 (6)

△僧云、向五蘊山中立生涯。

師曰、為什广五蘊山中立生涯。僧云、三世諸佛疑着這箇。

師曰、疑着底響。僧云、元来無一ヶ形骸段。

師便打。

宗左 (7)

△僧云、喚作一頭水牯牛。

師曰、為什广作水牯牛。僧提起坐具曰、此々々。

師曰、此之為什广。僧云、露迥々地趁亦不去也。

師便打。

宗晃 (8)

△僧云、西風一陳来落葉兩三片。

師曰、意旨如何。僧云、頭上顯露、物上現成。

師便打。

宗貞 (9)

△僧云、這箇是少林無孔笛。

師為什广作無孔笛。僧云、一曲兩曲無人會。

師曰、無人會底響。僧云、希声聞在不聞中。

師便打。

紹蘊 (10)

△僧云、修拄杖子。

師曰、為什广作拄杖子。僧云、行則共行、坐則共坐。

師曰、畢竟如何。僧云、轉処實能幽。

師便打。

宗什 (11)

△僧云、常從諸人面門出入。

師云、面門出入者如何。僧云、滿之眼滿耳無処回避。□□□

宗喜 (12)

△僧云、恰□一佛出現。

師云、如何是出現底一佛。僧云、梵天前引帝釈後隨。

師曰、梵天帝釈圍繞底如何。僧云、随処称尊。

師便打。

宗瑞 (13)

△侍者云、以無辺虚空為正躰以微塵刹界、為妙用。

師曰、正躰妙用一句道、看。者云、一毛頭上獅子百億毛頭現。

師曰、大師答云、待你一口吸盡西江水即向你道意旨作广生。者云、不防人道馬簸箕家小子。

師曰、意旨如何。者云、切忌道着。

師曰、更有所問昔召大灯国師陞座説法今召遠孫野衲入室勸辨是同耶是別□□□□分同別。

師曰、為什广不分同別。者云、□□□□今日和尚。

師曰、与广則露柱灯笼可騰笑。

師打曰、侍者風規無慚香林。

(14)

慶安三庚寅仲秋十九日 侍者 宗竺記焉

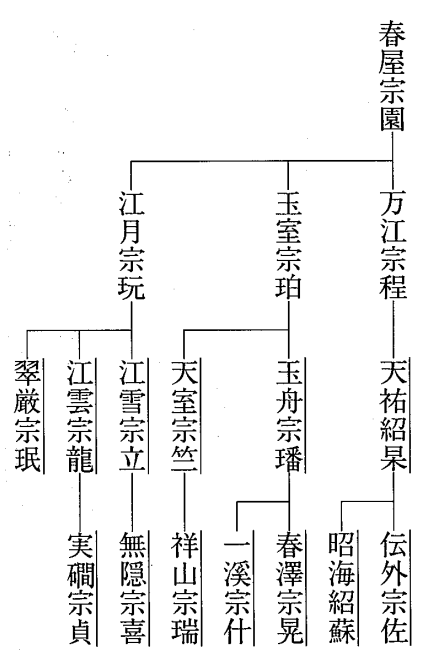
この入室に参加した僧とその法系は次のごとくである。

- (1) 天祐紹杲 (二六九世「二六二五」 一五八六一一六六六)
- (2) 江雪宗立 (二八一世「二六一〇・二六二五」 一五九五―一六六六) 首座 沢庵宗彭に参じ江月宗玩に嗣法
- (3) 江雲宗龍 (一八四世「二六四八」 一五九九―一六七九) 小堀遠州の子
- (4) 玉舟宗璠 (一八五世「二六四九」 一六〇一―一六六九) 玉室宗珀に嗣法、大徹明応禪師
- (5) 翠巖宗珉 (一九五世「二六五四」 一六〇八一六六四) 江月宗玩の俗甥 江月宗玩に嗣法
- (6) 宗美 不明
- (7) 傳外宗左 (一九六世「二六五八」 一六〇八一六七五)
- (8) 春澤宗晃 (二〇一世「二六六二」 一六一三一六九四)
- (9) 実礪宗貞 (徳禪寺?―?) 江雲宗龍の法嗣
- (10) 昭海宗蘇 (二〇三世 一六一二―一六六七)
- (11) 一溪宗什 (二二一世「二六六七」 一六一八一六八四)

(12) 無隠宗喜 (二二〇世「二六六七」 一六一八一六七二) 江雪宗立に嗣法

(13) 祥山宗瑞 (二二四世「二六六八」 一六一九―一六九三) 京都の人。天室に嗣法。東海寺輪番

(14) 天室宗竺 (一九〇世「二六五四」 一六〇五―一六六七) 侍者尾張の人。玉室宗珀に嗣法。



この入室勸辨に参じた僧の法系をみると、これまでの入室が春屋下と古嶽下とが入り交じって参加していたのであるが、この場合春屋下園下の門流(大仙門下三玄派)に限定されていることが確認される。また、これまでの入室に「禪人」として記されていた居士は参加しておらず、臣僧たる天祐が「太上天皇聖壽万歳」を祈る目的で行われたことが冒頭に明示されている。宮中の仙洞宮中入室は近世初頭の大徳寺と皇室とのつながりを確認する資料として意味をもっているであろう。ところでこの慶安三年という年は後光明天皇(在位 一六四三―一六五四)の時代であるが、仙洞は上皇の御所であるので、この入室

が營修された慶安三年八月一九日の時点では次の二人の上皇の仙洞が並立している。

上皇	讓位年月日	崩御年月日	仙洞御所
水尾上皇	寛永六年(一六二九) 一月八日	延宝八年(一六八〇) 八月一九日	内裏東南
明正上皇	寛永二〇年(一六四三) 一〇月三日	元禄九年(一六九六) 一月一〇日	内裏北

しかし大徳寺は紫衣事件でも明らかのように特に後水尾上皇とは関係も深く、当然この天祐紹景を師家とする入室は後水尾上皇の仙洞で行われたのであり、それは『宝山外志』の「後水尾上皇」の項にも「又一時召天祐和尚於仙洞、挙揚入室之法」(山田宗敏編『史料大徳寺の歴史』「毎日新聞社」四五三頁参照)とあって、これを確認することができる。

以上のごとくこの入室は後水尾上皇に対する祝聖儀礼の意味を有する入室問答であったのであるが、こうした宮中での入室の事例を検討する上で対比されるのが、曹洞宗における將軍家における御前法問である。徳川家は家康・秀忠の時代には各宗派の僧侶による法問や論議が將軍の御前で行われている。特に天台宗・浄土宗・曹洞宗・真言宗などが参加している。特に曹洞宗では慶長十一年(一六〇六)から元和元年(一六一五)にかけて、確認されるだけでも八回ほど、曹洞宗の僧が江戸城や駿府城に登城して、家康あるいは秀忠の前での法問(法戦式)を行っている。例えば慶長十一年十一月四日の法問は江戸

城本丸にて雙林寺鶴峯ら吉祥寺(神田)・青松寺(愛宕)が加わって「趙州無字」の話を家康の前にて提擧しているが、この法問について曹洞宗の記録では「城万代不易之御祈祷法問」(『當開山四派附』)とか「御城堅之祈祷法問」といつている。これも本来禅僧たちが古則に対する見解を競ってその境涯を高めていく本来の意義から祈祷的な意義に転化している例といえるであろう。

このように禅宗における問答が祈 的な意味を有するようになって近世初頭には皇室や將軍家・武士層に受用されていた事例が洞濟ともに見ることができたのである。

三、織田信長の葬礼における入室について

ところでこのような入室資料としては未だ筆者は確認していないが、この他にも入室が葬礼仏事においても大徳寺派において行われている例が織田信長の葬礼の事例である。すなわち天正十年六月二日本能寺に斃れた織田信長の葬礼が同年十月十五日に行われているが、その一連の仏事の中に入室の記述が、散見される。例えば『太閤記』には次のような記述がみえる。

壬午七月中旬、秀吉卿御次丸を相伴ひ、上洛しまして、於本能寺、前將軍御腹めされし寺にして、御愁歎甚しく、涙数行、正体もましまさぬ形勢、哀にも殊勝にも見えてけり、元来種姓たつとき人にはあらざれども、才器何れも無双肩に依て、將軍取立給ふて、諸侯の数に加えさせ給ひしが、後は数国を併せ領しけり、依

之、織田家の旧臣嫉み思ふ事ふかけれ共、信長公曾て事共せず、
 剩傘を御ゆるしなされしかば、旁御厚恩山より高く、海より深し
 と、骨髓に徹し忘れじと思へり、一念の剛なるは、世を累て通り
 ぬるとなむ云伝へしが、実に宜なり、人もこそ多きに、君のかた
 きを目前に誅平げ、殊に御葬礼を営み奉りたきと、当時におゐて
 初て心ざし有けり、抑此御次丸と申は、將軍の五男にておはせし
 を、養子に申請奉りしかば、同胞合体の腹臣也、亦不貴乎、北畠
 信雄卿三七殿、又は歴々の宿老衆有ければ、御葬礼の儀、催しな
 んもいかゞあるべきと、憚不軽ば、とかう延来て、九月に至るま
 で其沙汰もなし、秀吉永き夜のねざめに、昨友は今日の怨儲と成
 前榮は後衰と移り易りぬ、誰有て期来日乎、厚恩を報せずして衰
 ふる身となりなば、噬臍とも益なかるべしとて、於龍宝山大徳寺、
 十月初旬より、一七日の法事執行行ひ奉らんと、あし一万貫、并
 八木は播州より精白にして千石、大徳寺納所へ相渡し、奉行とし
 て杉原七郎左衛門尉・桑原次右衛門尉、副田甚兵衛尉を加えにけ
 り、其用意漸成て、十月十一日転経、十二日頓写施餓鬼、十三日
 懺法、十四日入室、十五日闍維、十六日宿忌、十七日陞座拈香、
 中にも十五日御葬礼の爲体、驚目計也、棺槨以金紗金襴囊之、軒
 の瓔珞欄干擬宝珠、悉鏤金銀、八角の柱尽丹青、八面の間の彩色
 御紋の桐引両筋なり、以沈香彫刻仏像、奉安置棺槨之中、蓮台野
 豎横広大而統洛中、四門之幕白綾方百二十間、中有火屋、其体魏
 然たり、惣廻りには結埒、羽柴小一郎秀長警固大将として、大徳
 寺より十町計の間、警固の武士一万有余、守護路之左右、弓鉄炮

其外鎗長刀を立つげ、すさまじき事も又頼し、近国に侍る信長
 公につかへ奉りし諸士参り会つ、御葬礼にあひしかば一入哀な
 り、御輿前轆池田小新後号三左衛門尉後轆御次丸昇給ふ、御位牌は公の八
 男御長丸、御太刀は秀吉卿奉持之、即不動国行也、二行に相列者
 三千余人、皆烏帽子着藤衣なり、始五岳、洛中洛外諸宗不知幾千
 万云数、各宗刷威儀、集会行道有、五色天蓋輝日、一様之旗翻風、
 香之煙如雲似霞、供具・盛物・龜足・造花作七宝莊嚴せり、寔九
 品浄土となん云共、恥べからざる事なり、

役者之次第

- 一、鎖籠 恰雲大和尚 一、掛真 玉仲大和尚
- 一、起籠 古溪大和尚 一、念誦 春屋大和尚
- 一、奠湯 明叔大和尚 一、奠茶 仙岳大和尚
- 一、拾骨 竹澗大和尚 一、秉炬 咲嶺和尚大禪師

其偈云、

四十九年夢一場、威名説什麼存亡、
 請香火裡烏曇鉢、吹作梅花遍界香、

即咲嶺より、秀吉へ焼香なされ候へと有しかば、御次丸相共に焼
 香の体いとたうとかりけり、天正十年の初冬望日巳刻、奉成無常
 之送畢、宴是一生別離之悲、誰か不痛乎、秀吉卿涙落とも覚えぬ
 に、袖は霏にぞなれりける、將軍の威気衣被天下独歩古今、上奉
 安震襟、下憐憐兆民、仍忝立勅使賜諡官、奉号總見院殿贈大相国
 一品泰巖大居士、法事初りし日より、毎日施行し給ふ事、一日の
 下行百二拾石宛、十七日に至て満り、かくて御位牌所として、建

立一字、号總見院、同卵塔為作事料、銀子千百枚渡之。(後略)

『大閤記』卷第三「信長公御葬礼之事」

また『寶山記談』にも次のような記述がある。

△天正十年歲舍二千午一六月二日、織田信長公為「明智」被殺矣。

同年十月十五日、羽柴秀勝於大德寺、為公執「行闍維追薦」佛

事、贈賻一萬貫。〈黃金五百枚也〉於蓮基臺野、闍維七佛事

〈鎖龕、恰雲和尚、掛真、玉仲和尚、起龕、古溪禾上、奠湯、明

叔禾上、奠茶、仙岳和尚、收骨、竹礪和尚、念誦〉追薦〈拈香、

春屋和尚、陞座、玉仲和尚、懺法、施食、頓写、漸写、轉經、入

室〉諸佛事・陞座・法語等、詳于別記也。賻餘之金有若干。

知事不「耐」私之、而告其餘數ヲ秀吉公ニ。曰、吾聞佛帑、不

回サ人、考ニ「餘數」造立一于一、以可レ為ニ「ニ」香火。於レ此、

命ニ古溪陳和尚ニ住持、号ニ總見院。後又令ニ玉甫琮和尚住持也。

〈寄ニ附ニ院領ニ三百石也。元和ノ沙汰ニ減ニ三百石也〉

『寶山記談』(飯塚大展「龍谷大学図書館蔵『大德寺夜話』」を

くつて(二)「参照)

このように信長の葬礼は「転經(十一日)↓頓写・施餓鬼(十二

日)↓懺法(十三日)↓入室(十四日)↓闍維(十五日)↓宿忌(十

六日)↓陞座拈香(十七日)という一週間の日程で営修されており、

この内十五日の闍維(茶毘)がいわゆる中心的儀礼であり、笑嶺宗訥

を乗炬師として八仏事師の名が列挙されていたのである。しかるにこ

の一週間の中日に当たる時に入室が修行されているのであり、これは

十五日の茶毘式の前に位置しており、元和年間における前田家の追善

法要に困んだ入室とはその位置づけに若干の相違があるが、基本的に
は古則の問答において境涯を披瀝することによる追薦、すなわち故人
の冥福を祈る回向に転用されたものであろう。

四、まとめ

さてこのような大德寺派における独特の入室勘辨なる資料をみてい
くと、元来の学人接化のための修行として行われてきた入室が次第に
形式が整えられて固定化し、これが前田家や織田家等の有力大名の仏
事、葬儀の際にも行われ、さらには宮中の祝聖のための宮中入室とい
うように、次第に公開され儀式化の方向に転じていく様子を知ること
ができるであろう。

現在管見する限りでの残存資料の分布を検討するならば、入室勘辨
は南派の祖東溪宗牧が初見であり、その後主として北派(派祖は古嶽
宗旦)において盛んに仏事や祝聖に転用されていくという流れにみえ
るが、北派自体が人材をより多く出しており、南派で衰退したとは単
純にはいえないであろう。いずれにしてもさらなる資料の発見が待た
れる。

こうした大德寺派の入室について、近世の大德寺派の大学匠として
名高い大德寺二七三世「一七〇六晋山」の「大心義統は(一六五七—
七三〇)はその主著『龍宝山大德寺誌』『骨董門』において次のよう
に記述している。

一 入室者乃師家勘辨学者ヲ、今叢林密參底是也。今人天衆

前設テ入室ヲ以爲ニ薦拔ノ佛事ニ是耶非耶余敢テ不知。 (坤卷)

すなわち元来、入室とは室内にて学者を勘辨する密修行であったのが、今日「薦拔ノ仏事」となったことは是非を大心はわからないとしている。このように江戸中期の大徳寺派においても本来の入室から何故に仏事に転用されるようになったのか、不明となっていたことを伺い知ることができる。

ところでこうした入室勘辨の成立を考える上で重要な意義を有する資料といえるのが、徹翁義亨の『勘辨録』なる資料である。これは『大徳寺語録集成』第一巻に某家所蔵の写本が影印収録されており、次のような内容となっている。

○師問、面々相對、心々相知時如何。

一僧云、来風深辨。師云、辨底響。

僧云、前箭猶自輕。師云、我被你勘破。

僧云、咩々。師云、一死不再活。

僧禮拜。師便打。

一僧云、裂破。師云、勘破了也。

僧便喝。師低頭休去。

一僧云、方知。師云、知底響。

僧云、惱乱春風卒未休。師云、我被你勘破。

僧云、咩々。師云、師低頭休去。

一僧云、勘破了。師云、試呈露看。

僧擬議。師便打。

○師因聞鐘聲、問鐘聲響。

一僧云、響。師云、一句道著。

僧云、一種是声無限量。有堪聽。師云、鐘声耶語声耶。

僧便喝。師代云、学人從來不迷此声。

〔中略〕

右 天應國師勘辨録 一休和尚真蹟并行狀南江沅和尚之墨痕也。宗賢謹證之。

『勘辨録』某家所蔵、(写本、一冊)

この資料は一休宗純の筆といわれるが東溪宗牧の「入室勘辨」と比較してみると、かなり共通した形態であることが知られるであろう。ただし東溪以降は古則を勘辨の前提として提起し、この古則を主題に商量していくのであるが、徹翁の場合、古則を用いず、垂示のように日常の禪林におけるさまざま局面で話題が提示され(例えば轆轤や鐘の音を聞いた時、降雨などの天候のことなど)、時節や機縁に因んで随時会下に問答の形で説示している。徹翁以降の大徳寺派の垂示は、その多くが一転語や代語などによるのであるが、この徹翁の『勘辨録』の形態は入室勘辨と同様であり、「・・響」「師便打」など後の東溪宗牧の「入室勘辨」で用いられる言い回しや動作を見ることができ、またこの徹翁の勘辨は密参という室内における商量ではなく、むしろ複数の僧が師の質問に対して問答の応酬をしているという点が注目されるであろう。

したがって大徳寺派における入室の展開は、まず徹翁義亨の『勘辨録』のように、叢林の年分行事などの定められた時節に限らず、禪林の日常生活におけるさまざまな機縁に基づいて古則を用いずに自由な

問答が展開され、場所も方丈に限らず学人を勘辨・接化していたのであるが、東溪の時代になると古則を用いた入室勘辨という問答形式が定式化するようになってきたのである。入室は元来養叟の入室屋のように本来は密参と同一の意味であったのであり、室内という限定的な空間における古則商量であったのであるが、一五世紀末から東溪宗牧以降の大徳寺派の禅僧たちによって行われてきた入室勘辨は一对一の室内における密参ではなく、複数の学人が師と問答を展開するもので、これは徹翁以来の勘辨の伝統に基づいていたのである。そして次第に問答の形式が固定化されて叢林内の中での公開的な禅問答となっていたのであり、これが前田家の仏事や信長の葬儀、さらには仙洞御所での祝聖の入室など儀礼化されていったのである。このように中世末期から近世初頭における大徳寺派の入室は、学人の育成という元来の意味から、次第にこれを聴聞する在家の仏事や祈禱に用いられていったのであり、近世白隠下の禅において改めて元来の入室独参という修行形態に引き戻されることになるのである。

勘辨録 (徹翁義亨)	入室勘辨 (東溪宗牧)	入室勘辨 (玉室宗珀・天祐紹梟等)
古則を用いず 自由な問答	古則を用いる 問答も規則的	固定化入室勘辨 儀式化(仏事・祝聖)

注記

(1) 鏡島元隆・佐藤達玄・小坂機融『訳注禅苑清規』、曹洞宗宗務庁刊、六七頁、参照。

(2) 東福寺史、健治元年九月の項(二二二頁)参照。また『聖一国師語録』には「示三藤丞相道家」の法語が記載されている。
(大正蔵、第八〇巻、一一頁上)

(3) 龍源院蔵本の翻刻書き下し本が昭和四一年に刊行されている。
細合喝堂和文訳編輯『東溪宗牧禅師語録』淡交新社。

(4) 石田雅彦「天正三年正月南宗寺問答と堺の茶人たち」、『法政史学』第四七号、一九九五年。田中博美「茶道大成期における堺と南宗寺の位置」、『茶道学大系 一 茶道の歴史』、淡交社、一九九九年。同「圓悟克勤の墨跡」、『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』第一七号、二〇〇三年。尚、本稿では田中氏の「圓悟克勤の墨跡」所収の資料に基づいている。

(5) 拙著『中世禅宗文献の研究』国書刊行会、四二―四二八頁、参照。

(*1) 本稿において紹介した入室資料は平成十五年十一月二十九日に花園大学で開催された禅学研究会の「大徳寺派の入室と垂示について」の発表した資料中のものであるが、その後飯塚大展氏の「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐって(四)」(『駒澤大学禅研究所年報』第十五号、平成十五年十二月刊行)の論稿中に、次のような入室資料が言及されていることを知り得た。飯塚氏の御指摘(九六―九七頁)によると、大徳寺塔頭の龍光院に春浦宗熙の入室勘辨、同じく大徳寺塔頭である高桐院に「古溪宗陳入室行記」が所蔵されているとのことである。